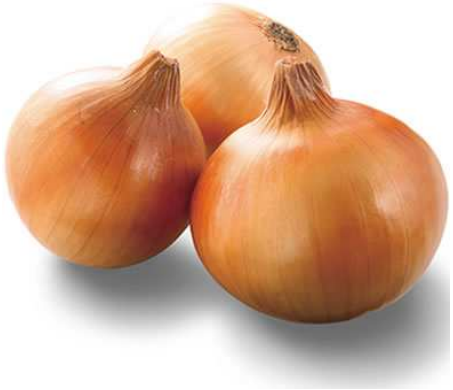
平成２４年度　富良野市立布部小学校　学芸会・演劇祭上演台本

オニオンたろう



作・布部小児童たちと
今村先生

（　　）ねん　（　　）

キャスト

オニオンたろう　（5年　　）

おにひめ　（5年　　）

キタキツネ　（3年　　）

ヒグマ　（3年

ロボット　（2年　　）

村長さん　（2年　　）

村人（たまきち）（1年　　）

村人（ねぎべえ）（1年　　）

わたあめ会社社長　（2年　　）

わたあめ会社工場長　（2年　　）

ホワイトライオン　（2年　　）

プロローグ　『大きなオニオン』

『ももたちろう』のうたがながれ、まくがあく。ステージの上はうすぐらい。
たまきちとねぎべえが出てくる。
2人はおきゃくさんにむかって「つり」をしている。

ナレーター1(録音)「むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがすんでいました。おばあさんが川でせんたくをしていると、おおきなモモがどんぶらこっこ」
ナレーター2(録音)「ちょっとまって、それはももたろうでしょ。これからはじまるものがたりは、オニオンたろうよ。」
ナレーター1(録音)「え？ちがうの？」
ナレーター2(録音)「オニオンたろうはね、2人のつりびとからはじまるのよ…」

ねぎべえ「つれないなあ！たまきち。」
たまきち「つれないなあ！ねぎべえ。」
ねぎべえ「この、空知川のさかなも、ずいぶんへったもんだ。なあ、たまきち。」
たまきち「しょうがないさ、ねぎべえ。あんなにでっかいこうじょうが、できたんだから。」
ねぎべえ「お！」(2人のうしろを小さい玉がよこぎる。)
たまきち「お？」
ねぎべえ「あ、UFOだ」(2人のうしろを中くらいの玉がよこぎる。)
たまきち「ちがうよねぎべえ。オニオンだよ」
2人「でっかいでっかい、オニオンだ――！」

大きなオニオン(タマネギ)が流れる。(流れ星のように？)
ズドーンという、いんせきが落ちたような大きな音。
くらくなり、かげ絵スクリーンが用意され、光があたる。

《かげ絵》（声は録音でもよい）
大きなタマネギがある。
そのまわりに、たまきち・ねぎべえと、村長さん(かげ絵人形)。

2人「村長！」
たまきち「でっかいニオンです！」
ねぎべえ「空からふってきたんです！」
村長「なんておいしそうな、おおきなオニオン！さっそく切って、みんなで食べようじゃないか。」

そのとき、ポンと音がして、オニオンがわれて、人(かげ絵人形)がとび出してくる。

オニオン「まって!食べないで!」
3人「わあ!」
村長「なんてびっくり!オニオンから人がうまれるなんて…よし!おまえの名前は…!」

スクリーンに、タイトル文字(かげ絵)。

みんな「オニオンたろう!(タイトルコール)　はじまり　はじまり!」

くらくなる。オニオンたろうにスポットライト

オニオン「ぼくの名前は、オニオンたろう。やさしい村の人たちが名付けてくれた。だけど、ぼくは、本当は…」

シーン1　『布部村』

ステージの上があかるくなると、村の中。『ようこそ布部村へ』というかんばんがある。
「わた」だらけの村。
われたオニオンの横に、たまきち・ねぎべえ。村長はわたあめを作っている。

オニオン「かっこいい名前をつけてくれてありがとう!」
村長「うむ。わたしは布部村の村長だ。よろしく、オニオンたろう!」(あくしゅする)
オニオン「よろしくおねがいします!」(あくしゅする)
たまきち(われたオニオンをちょっとつまんで食べて)「うまい!」
ねぎべえ(おなじようにつまんで食べて)「さいこう!」
村長「じつは、昔このあたりはオニオン畑にかこまれた、ゆたかな村だった。しかしある時、おにのようにこわ〜い姫が、オニオンを作ることを、きんししてしまったんだ!」
たまきち「かわりに、わたあめばかりつくらせるようになったのさ!」
ねぎべえ「わたあめはもうあきた!おかげで、からだじゅうあまくて、べとべとだ!」
オニオン「なんてひどい話だ。」
村長「みんなほんとは、またオニオンをつくりたいけど、おに姫がこわいから、じっとがまんしているんだよ。」
オニオン「よし!ぼくがその、おに姫をたいじしてきましょう!」
3人「えっ?」
村長「ほんとうかい?」
オニオン「布部に、オニオンを、とりもどしましょう!」
3人「おお!」(はくしゅ)

村長「ああ、なにか力のわくものをもたせてあげたいけど、この村には、わたあめしかないからなあ…」
たまきち「村長！このオニオンがあるじゃないですか！」
ねぎべえ「こうやってオニオンパウダーをつくれば！」
村長「そうか、わたあめにふりかけて…」

みんなで食べてみる。（キラキラリーン☆）

みんな「ワーオ☆」
村長「オニオン味のわたあめの、かんせいだ！」
オニオン「ありがとう！これをもって、おに姫たいじに、いってきます！」
3人「たのんだよー！」（手をふる）

オニオンたろう、さる。

たまきち「これであんしんですね！」
ねぎべえ「ひとりでだいじょうぶかなあ？」
村長「そうだなあ…」

シーン2　『おに姫城へのたび』

暗転。
キタキツネが登場。ロボットはすみの方でたおれている。

キツネ「（草の実をつみながら）♪こぎつねこんこんやまのなかーやまのなかーくさのみつぶしておけしょうしたり、もみじのかんざしつげのくしーこぎつねこんこん…おや？なつかしいにおいコン。」

オニオンたろうが、“オニオンわたあめ”と、『日本一のオニオンたろう』とかかれたはたをもって、登場。

オニオン「あ、キツネさん。」
キツネ「（オニオンたろうに気づいて）！（歌）オーニオンたろうさんオニオンたろうさん　おこしにつけたオニオンわたあめ　ひとつわたしにください コン♪」
オニオン「（歌）あげましょうあげましょう　おに姫城がどこにあるのか　おしえてくれるならあげましょう♪」
キツネ「もちろん知っているコン。だってわたしは、なんでも知ってる、じょうほうツウのキタ

キツネー!」
オニオン「じゃああんないしてくれないか?はいどうぞ。(オニオンわたあめをわたす)」
キツネ「(食べて)これは!おくぶかいあじわい!ついて行くコン!」
オニオン「ありがとう!…ところで、それはなに?(ロボットを指さし)」
キツネ「ガラクタだコン。」
オニオン「動かないの?」
キツネ「こわれてるコン。」
オニオン「へ〜」

オニオンたろうたちはロボットの方へ歩みより、のぞきこむ。
うしろから、ヒグマが登場。(のっそのっそと)

クマ「……」(無言で2人にちかづいていく)
2人「ぎゃー!ヒグマだー!」(にげる)
クマ「あれ?」(無言でおっていく)
2人「ぎゃー!」(またにげる)
オニオン「死んだふり!死んだふり!」
キツネ「だめ!じっと目を見て、少しずつうしろへ下がるコン!」(ジリジリあとずさり)
クマ「…ガオー。」(両手を上げる)
2人「ぎゃー。」(すわりこむ)
クマ「(歌)オーニオンたろうさんオニオンたろうさん　おこしにつけたオニオンわたあめ
ひとつわたしによこすクマ♪」
オニオン「(歌)あげましょうあげましょう　ぼくらといっしょにおに姫と　たたかってくれたらうれしいな♪(おそるおそる、オニオンわたあめをわたす)」
クマ「(食べて)これは!新感覚な味!よし、てつだうクマー!」
2人「ありがとう!」
ロボ「ギ…ギギ…ギ…」
キツネ「あれ?なんの音?」
キツネ「うごいてるクマ。」
オニオン「ロボットだったんだ。かっこいい!」
キツネ「でもちょっとさびてるコン。」
ロボ「♪(歌おうとするけど、さびてて歌にならない)オーニギギギ…」
クマ「かわいそうクマ。」
オニオン「じゃあ、このオニオンオイルで…」(オイルをさす)
ロボ(元気にうごきだして)「おれはロボットだロボー!(ロボっぽいしゃべりかたで)」
3人「やったー。」
オニオン「なんかかっこいいから、つれていこう。」
ロボ「ロボー!」(どこか、ちがうところにすすんで行こうとする)

3人「ありがとうー!」(ちょっとごういんにつれて行く)

オニオンたろうたちは元気よくさうていく。
すぐにふたたび登場。空知川のきしにとうちゃく。

クマ「空知川だクマー!」
キツネ「この川のむこうに、おに姫のいる『おに姫城』がある「コン。」
ロボ「がんばるロボ。」
オニオン「みんな、かくごはいいか?いくぞー!」
3人「おー!」

走りさる。
舞台そでから、一人ずつかおを出して

キツネ「これからどんなたたかいがまちうけているのか!」
クマ「このつづきは…」
みんな「CMのあとで!」

くらくなる。

《映像》 布部小学校CM(約1分間)

シーン3 『おに姫城』

ステージ上はうすぐらい。かみなりの音。
オニオンたろうたち、ステージ前のスペースにこっそりと登場。

クマ「ついたクマー!」
ロボ「しー!」
キツネ「お、なにやら話し声がきこえるコン。」
オニオン「かくれよう!」

4人、かくれてステージ上をのぞく。

門番「ひめさまの、おな~り~!」

迫力ある曲とともに、おに姫が、ホワイトライオンをひきつれ、仰々しく登場。
(中割幕の間から?最初はライトをバックに、シルエットのみ)

社長と工場長が頭を下げている。おに姫、ゆっくり出てきて、いすに座る。
わたあめ会社。

姫「アテンションプリーズ。それでは『しんさくわたあめ、かいはつかいぎ』をはじめます。」
3人「はじめまーす。」
姫「社長と工場長は、アイディアを出してください。」
社長「はい。」
姫「はい、社長。」
社長「姫、実験ができるわたあめなんでどうですか?」
3人「おお〜。」(はくしゅ)
姫「たとえばどんなのかしら?」
社長「水をかけると大きくなるというのはどうでしょう。」
姫「それじゃあもうからないじゃない。」
工場長「はい。」
姫「はい、工場長。」
工場長「姫、とうめいなわたあめなんてどうでしょう。」
姫「それじゃあ見えなくて、食べられないじゃない。」
社長「はい。」
姫「はい、社長。」
社長「ようふくのように『きられる』わたあめなんてどうでしょう。」
姫「からだじゅうベタベタよ。」
工場長「はい。」
姫「はい、工場長。」
工場長「かわいい顔のかたちをしたわたあめなんてどうでしょう。」
姫「アンパンマンみたいでイヤ。わたしはジャムおじさんじゃないわ。」
社長・工場長「う〜ん…。」
姫「どれもだめ。まだまだインパクトがたりないわ!はやく大ヒットしょうひんを生みだして…世界中をわたあめでうめつくすのよっ!!」

オニオンたろうたち、とびだしてくる。

オニオンたち「そうはさせるか!」
姫「だれっ?」
オニオン「せいぎのオニオン軍団、さんじょう!」
姫「せいぎ…?わらわせてくれるわ。やっておしまい!」
社長・工場長・ライオン「おー!」

たたかいがはじまる。オニオン軍団 VS わたあめ会社社員

社長と工場長は、わたあめっぽい技をかける。いい勝負。

ライオン「そろそろおれのでばんかな？」
社長・工場長「ホワイトライオン！」
キツネ「うわ、なんてつよそうなんだコン。」
クマ「ライオンなんてずるいクマ。」
ライオン「ライオンパーンチ！」（すごい動き）
オニオン軍団（にげながら）「わーー！」
ライオン「ハハハハ！おれはひゃくじゅうのおう、ホワイトライオンだ！」

ライオン、ガッツポーズ！
そこに、オニオンたろうが、オニオン味のわたあめを投げる。

ライオン「はっ！なんてうまそうな、わたあめなんだ！」（くらいつく）
オニオンたろう「いまだーー！」

みんなでライオンを「いいこいいこ」して、てなずける。

ライオン「ゴロゴロゴロゴロニャーー。」
オニオン軍団「やったーー！」

ついに、おに姫が、まえにでてくる。

姫「まったく、なさけないわね。」
社長・工場長「姫！」
姫「わたしがじきじきに相手になってあげるわ！」
オニオン「よーし、勝負だ、おに姫！」

姫 VS オニオンたろう。まわりは応援。姫がすごくつよい。

オニオン「くそー。こうなったら、さいしゅうへいきだ。くらえ！ひっさつ、オニオンおろし！
（姫の目の前に、巨大な「おろし器」をかかげて、大きなオニオンをすりおろす。）」
姫「キャーッ！」
オニオン「どうだ！ひさしぶりのオニオンは！」
姫「やめて…なみだが、なみだがとまらないわっ！」

姫、なきながらすわりこんでしまう。
たたかいがおわる。

シーン4　『姫のむかしばなし』

姫はしくしくないている。
みんな、姫をとりかこむ。

キツネ「おに姫さん、なんでこんなひどいことをしてるんだコン。」
姫「……。」(しくしくないている)

少し間。

ライオン「…姫さまは、ほんとはわるい人じゃないんだニャー」
クマ「えっ?どういうことクマ?」
社長「じつは…姫はむかし、布部にすんでいたんだ。」
工場長「オニオンがなによりも大好きなお姫さまだった。」
キツネ「じゃあなんで。」
村長「それはわたしからはなそう。」
みんな「村長!」

村長と、たまきち・ねぎべえが登場。

村長「あまりにオニオン好きだった姫は、村中のオニオンをすべて集めさせ、食べつくしてしまいそうになった。村人たちはこまった。だって特産物(とくさんぶつ)のオニオンがすべてなくなってしまったら、生活ができなくなるからね。そんなある日、村のわかものが、ちょっとしたいたずら心で、姫にあげたオニオンにどくをいれてしまったんだ。」
社長「あの日、姫はすごくよろこんでいた。いつもはつめたい村人が、きょうはわたしにオニオンをプレゼントしてくれたって…」
工場長「だから、うらぎられたきもちもよけいに大きくてね。」
ロボ「かわいそうロボ。」
クマ「じゃあ、その心のキズが原因で…?」
姫「そうよ!オニオンなんてもう見たくもない!」
オニオン「でも、本当はオニオンがすきなんだろう?」
姫「そんなわけないじゃない!時代はわたあめよ!わたあめさえあれば…わたあめさえあれば…!」
オニオン「そのせいで…未来から、オニオンはなくなってしまったんだぞ!」
みんな「えっ?」
姫「どういうこと?」
オニオン「ぼくは、森でぐうぜん見つけた巨大オニオン…いや、オニオン型のタイムマシンにのって、未来からやってきたんだ。」

みんな「えっ!」
オニオン「もう、いいかげん、目をさましてよ!かあさん!!」
みんな「え――――!!」

シーン4　『おかあさんの目をさませ』

姫「わたしの…子?」
オニオン「あんな未来はコリゴリだ!かあさん、未来はわたあめだらけだよ。毎日毎日わたあめばっかり…。もう体中ベタベタさ!」
キツネ「それはきつい。」
オニオン「ぼくだって、オニオンが食べたいんだー!」
姫「オニオンオニオンうるさいわね!そんな話しんじないわ!わたしはねえ、秋になるとプーンとただよってくる、あのオニオンのかおりが、たまらなくいやなのよ!」
オニオン「かあさん…。」

おに姫、いすに座って、そっぽを向いてしまう。間。

村長「♪**オニオン　さあ**○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○　○○○○○○」（西城秀樹『ヤングマン』のリズムで）
姫「なにを…?」
村長「この国歌、むかし姫がつくったんですよね?」
オニオン「この国の歌を?かあさんが?」
村長「本当は、オニオンが食べたくて食べたくて、しかたがないんじゃないですか?」
村長＋村人　♪**オニオン　ほら**○○○○○○
村長＋村人＋オニオン軍団　♪**オニオン**　○○○○○○○○
村長＋村人＋オニオン軍団＋わたあめ会社軍団　♪**オニオン**　○○○○○○○○　○○○○○○
姫「その歌はやめて!」

おに姫、立ち上がって、みんなからにげるように動く。
みんなは、そんなおに姫を、ぞろぞろと追いかけながら

姫以外のみんな　♪**すばらしい!　オ～ニ～オン～　オ～ニ～オン～**
♪　○○○○○○　○○○○○○　○○○○○○○○○

おに姫、またそっぽを向いて、いすに座るが、多少どうようしている。

キツネ「姫の心がゆれているコン！」
クマ「でもやっぱり、わたしたちだけの力じゃ、たりないクマ！」
社長「そうだ！会場のみなさん。ちからをかしてくれませんか！？」
工場長「どうか、わたしたちにつづいて、うたって、おどってください！」
村長「おねがいします！」
みんな「おねがいします！」
ロボ「まずはオー（O）！」**（みんなで「オー（O）！」）**
ライオン「つぎはエヌ（N）！」**（みんなで「エヌ（N）！」）**
ロボ「もういちどオー（O）！」**（みんなで「オー（O）！」）**
ライオン「さいごはエヌ（N）！」**（みんなで「エヌ（N）！」）**
キツネ「つづけていっしょに！せーの！」♪**オ〜ニ〜オンー**　**（みんなで「（ONON）」）**
クマ「もういちど！」♪**オ〜ニ〜オンー**　**（みんなで「（ONON）」）**
♪○○○○○○　○○○○○○　○○○○○○○○○
（姫、ちょっとふりかえるけど、またうしろむく）

ロボ「おしい！」
ライオン「もうちょっとだ！」
社長「さあ、はずかしがらずに！」
工場長「せーの！」
♪**オ〜ニ〜オンー**　**オ〜ニ〜オンー**
○○○○○○　○○○○○○　○○○○○○○○○
オニオンー　**さあ**○○○○○○○
オニオンー　○○○○○○○○
オニオンー　○○○○○○○　○○○○○○　**（姫、うしろむいたまま、立ち上がる**
オニオンー　**ほら**○○○○○○
オニオンー　○○○○○○○
オニオンー　○○○○○○○　○○○○○○　**（姫、元気よくふりかえる！かがやいている！）**

音楽『ヤングマン』が入る（「♪ジャッ ジャッ ジャッ ジャジャッ」　から）

姫「♪**す・ば・ら・し・い！**」
♪**オ〜ニ〜オンー**　**（みんなもいっしょに！）**　**オ〜ニ〜オンー**
○○○○○○　○○○○○○　○○○○○○○○○
そうさ　**オ〜ニ〜オンー**　**（大きな声で！）**　**オ〜ニ〜オンー**
○○○○○○　○○○○○○　○○○○○○○○○

オニオン　○○○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○　○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○
オニオン　○○○○○○○○　○○○○○○○ー

音とまる。
間。

姫「わたし、やっぱり…オニオンがすき!」
みんな「やったーーー!」

みんなわーわー言ってもりあがる。
音楽『ヤングマン』(曲途中から)、ふたたび入り、大きくなる。
全員ストップモーション。

エピローグ　『その後の話』

他の人はストップモーションのなか、キツネとクマが前にでてくる。
音楽『ヤングマン』の音量が少し下がる。

キツネ「それからというもの、布部では、村人と工場が、共同開発した『オニオンわたあめ』が、大ヒットし、人々は、とてもゆたかに、たのしく、くらしました。」
クマ「そうそう、おにおんたろうは、ロボットさんのふしぎな力で、また、みらいへと、もどっていきましたとさ。」

巨大オニオンの中に、ロボットがオニオンたろうを入れる。

オニオン「またね〜」(バイバイ)
ロボット「えい!」
みんな「めでたし!めでたし!」

音楽『ヤングマン』が、もう一度大きくなり
まくがとじる。

そして、カーテンコール

おしまい